

## 「ながら見守り」呼びかけの反響

今、新しい学校教育目標について、保護者アンケートを行っています。今朝、早速いただいた中に次のような意見がありました。

かわらばん3月号の校長先生のおっしゃっていた「近所の人顔も知らない状況」という言葉に共感しました。~略~

学校に行ったときは、知らない子に挨拶をすれば気持ちよく挨拶を返してくれますが、学校外で、下校時の子に「お帰り」と声をかけても、ぺこっとしてくれる子はまして、不審がって小走りで行く子にはショックを受けました。でも、「自らを守る」をしていたんでしょね。「ながら見守り」で朗らかな吉敷地区になっていくと良いですね。

この保護者は、私が地域の方に呼びかける以前から、「ながら見守り」をされているのでしょ。しかし、現時点では児童の方に何も伝えていませんので、せっかくの行為も実を結んでいないようです。

以前、地域の会でこの取組について話した際、「地域では声をかけても反応がないことが多いが、今の子ども達は、学校で、知らない人とは安易に話さない、と教えられているのだから仕方がない。」という声が上がりました。

この様な話はよく聞きますが、皆さんはどのように思われますか。「それはそうだよね、今の世の中では仕方ないかも。学校も門を閉めて外部を遮断しているんだし。」でしょか。

私は、そうは思いません。確かに、今から17年前の平成13年の池田小事件前後から、学校(文科省)は児童の安全を守るために外部を完全遮断する道を選びました。私自身、かつて県教委の学校安全班に勤務していたとき、この取組を強力に推進した担当者でもあります。また、今でも「いかのおすし」の『し』として、知らない人に

ついて行かない、と教えています。

しかし、時代が変わり、地域とともにある学校づくりを進めている今、この考え方は改めるべきだと思います。

学校の子供達は、学校を開いてこそ守られると考えます。学校を広く開き、学校にどんどん人を招き、学校の取組を知っていただき、さらには一緒になって子どもを育てていく。いわゆる社会総がかりでの学校教育を進めることこそが、本当の意味での子どもの安心・安全が確保できるのではないでしょか。

開かれた学校づくりのもとで、家庭・地域とともに子どもを育成する地域では、子どもと大人がお互いに顔見知りであり、大人は子どもに「あたたかい言葉」を自然にかける、子どもも、特にお年寄りに「あたたかい言葉」をかける。本校は、吉敷がそういう地域となっていくきっかけを作りたいと思います。

学校だよりで、地域に「ながら見守り」を呼びかけた今、学校としても、子ども達に、その趣旨をよく話し、これから吉敷地区では、吉敷地域の知らない人にも声をかけていきましょう、と指導していきたいものです。

地域みんなが顔見知りになる取組は簡単には成果は出ないでしょ。地道に何年もかかると思います。

まずは、家庭で自分の住む近所の人をもう一度よく知り、近所から声かけを始めることが必要かと考えます。

学校としては、今後、以下の内容を指導してほしいと考えます。菊川先生以下、生徒指導部で検討して下さい。

○校長先生が地域の方々に、下校の時の声かけを呼びかけたので、地域の人からのお帰り、という声かけが増えるかもしれない。  
○声をかけられたら、「ありがとうございます。ただいま。」と返事ができるといいね。

よろしくをお願いします。